夢端草
上
ADULT ONLY
R18
ぐるぐるめー

夢端草（むたんそう）

上

ぐるぐるめー

この物語は架空の世界で描かれるフィクションであり、実在する商品、団体、地名、人物とは一切関係がありません。
この物語には男性同士の同性愛表現があります。
一部性的な表現があるため、18歳未満の閲覧はご遠慮ください。

目次

第一話　ジェイクの武器屋へようこそ！…… 8
第二話　アントンは優秀な銃職人…… 17
第三話　幼き家出少女ロゼッタ…… 27
第四話　ジェイクの仮面…… 41
第五話　不思議な夢の花…… 53
第六話　ロゼッタは天性のブースター…… 65
第七話　忠誠心という名の恋情（一部R18）…… 77
第八話　人の想いの眠る場所…… 87
第九話　仲良しクッキング…… 96
第十話　繊細族（センシティア）の朝市…… 106
第十一話　「関　兵八」の、包丁を研ぐ！…… 116

第十二話　ロゼッタ貸します……126
第十三話　人間の価値……147
第十四話　ロゼッタの冒険……159
第十五話　冒険にトラブルはつきもの……176

第一話　ジェイクの武器屋へようこそ！

時は第一次産業革命時代！長い戦乱の時代が終わり、貴族に代わって成金たちが奴隷を酷使し蒸気機関が発達した。騎士は剣を札束に変え、世界を相手に金で殴り合う時代。人々は〝IN GOD WE TRUST（かみをしんじる）〟ならぬ、〝INGOT WE TRUST（かねをしんじる）〟が合言葉というありさまだ。

そんな成熟しすぎて腐敗した剣と魔法のファンタジー世界で、とある猿族（エイプス）の中年男が、武器屋を求めて街をさまよっていた。

「ち、クソ、今日はとことんついてねえな！あの野郎、絶対見つけてブチ殺してやる！」

男が武器を求めていたのには訳がある。商談に向かう道中でスリに拳銃を盗まれたのだ。男は拳銃をたいそう大事にしていて、腰のホルスターを常に撫で繰り回す癖があった。そしていつものようにホルスターを撫で繰り回した時、革製のホルスターが

ペコッと凹んだことで、初めて盗まれたと気づいたのだ。
思い返してみると、すれ違う時にどしんと誰かにぶつかった気がする。あの時か。
男は気が動転し、商談には遅刻し印象は最悪。交渉は決裂し、半べそで会社に戻る羽目になったのである。
散々な目に遭った男はスカスカのホルスターがどうにも落ち着かず、間に合わせに安物の銃を買おうかと、武器屋を探して歩いていたのだ。
と、遠方に拳銃の袖看板が見える。武器屋はあそこか。男は速足で店に飛び込んだ。
「すまない、何でもいいから安物の拳銃一丁売ってくれ。護身用に欲しい」
店内もろくに見ずに拳銃のショウケースにまっすぐ歩いてきた男は、ショウケースの上に置かれた獣の手に違和感を覚え、そこで初めて視線を上げて店主の顔を見た。
三ツ口の鼻面から伸びた太く長いヒゲ、煌めく犬歯、顔の右半分を革製の仮面で隠し、仮面の奥から覗く大きな金色の猫目。長い漆黒の猫っ毛の頭のてっぺんには、三

角形のピンと直立した大きな猫耳があった。店主は武器屋としては珍しい猫族（シェルパ）の男だった。

「いらっしゃい、本当に安物の銃でいいのかい？　間に合わせに買うんなら、大通りに猿のパチモン武器屋があるぜ」

猿族（エイプス）の男はまさか猫族（シェルパ）が武器を売っているとは思わなかったため、拳銃のモデルよりも店主に興味が湧いたようだ。

「猫族（シェルパ）がよく拳銃なんかに興味を持ったな？　猫の手では全身火だるまになっちまうだろ？」

拳銃の火花は毛むくじゃらの種族にとって相性がすこぶる悪い。毛皮に引火して火だるまになり、大火傷をしてしまうからだ。そのため犬族（バークス）や猫族（シェルパ）、熊族（グリズル）などの毛むくじゃらの種族は銃などの火器が扱えないのが常識だった。しかし。

「俺は猫族（シェルパ）と猿族（エイプス）のハーフなんだ。だからほら、手も体もコートのホコリ取りブ

ラシみたいに毛が短くて、火器を扱っても引火しないのさ」

「世界広しといっても俺ぐらいだろうな、銃を扱う猫なんて」と、店主は笑った。

すると、猫族（シェルパ）の店主は真面目な顔になり、猿族（エイプス）の男に目を合わせた。

「ところでよお、本当に安物でいいのかい？うちには使い捨ての安物も無いことはないが、もっと掘り出し物がいっぱいあるんだぜ？」

猿族（エイプス）の男がショウケースに目を落とすと、最前列・最上段に置かれた使い捨て魔法銃の奥に、気になるエンブレムの拳銃を見つけた。

「こ、このエンブレムは……伝説のＴＰ工房のフリントロック式銃……！こんな年代物まだ売っているのか！おや、その奥のは、これは珍しい。同社が一時期で製造を止めた限定物のフリントロックリボルバーじゃないか！プレミアものだぞ！ど、どうしてこんな小さな武器屋にこんなレアものが落ちているんだ？」

店主はフフフと笑うと胸を張って名乗った。

「そりゃあそうさ！老舗武器屋・マクソン工房の六代目、世界中のマニアックな武器

を専門に取り扱う知る人ぞ知る名店・ジェイク様の武器屋なんだからな！」
「へーそうなのか。初めて聞いた」
猿族（エイプス）の男の薄い反応に、店主の猫族（シェルパ）・ジェイクは盛大にくずおれた。あまりにも知名度が低い。
夢中でショウケースに張り付いていた男だったが、最下段の手前に、ヒョウ柄のテクスチャが彫り込まれたマグナムを見つけた。
「む！これは……！このヒョウ柄のテクスチャはベイズ工房の五六式マグナム魔法銃じゃないか！子供の時新聞広告で見て憧れてたんだよな……！」
「お、そいつは銘品中の銘品だぜ。お目が高いねえ」
「ちょっと触ってみていいかな？」
ジェイクがショウケースの鍵を開け、男の手に銃を握らせると、男は恍惚の表情で拳銃を嘗め回すように眺めた。
「う、美しい……。ああ、本物はこんなに大きくてずっしりしているのか……。この

手触りもワイルドで一点もの級だな。憧れの銃が、こんなところに……」
「買うかい？」
「買う！」
即答だった。その鼻っぱしにジェイクはプライスカードを突きつけた。
「まいどあり」
「む?! 嘘だろ、〇が多すぎないか？」
「限定品だからねえ……」
男は銃をショウケースの上に置き、動物園のチンパンジーのごとくうろうろ歩き回った。両手で頭を抱えたり、口元を押さえたり、腕組みをしたり、せわしなく動く様子から見るに、かなり葛藤しているようだ。
「でもなあ……でもなあ……！……でもなあ。……ああ、でも！でも！」
そしてハッと顔を上げ、意を決して「割賦で払う！」と宣言した。
「頭金は有り金全部だ。どのぐらいある？」
「致し方ない、これで手持ちは全部だ！持って行け！」

「お買い上げありがとうございます。では、割賦契約書と、拳銃所持許可申請書にご記入ください。身分証あります？」

男は「必ず残金は払いに来る」と、目を潤ませながら書類に記入していた。その涙は、有り金全てを失った悲しみなのか、お宝を手に入れた喜びなのか、ジェイクには判別できなかった。

「この店、偶然見つけたから道を知らないんだ。地図はあるかな？」

「販促用チラシでよければ」

「それでいい」

男は魔法の弾丸数発と新しい専用ホルスターも購入し、いつものように後生大事にホルスターを撫で繰り回しながら満足そうに帰って行った。

「たまに大物が売れるから辞められねーんだよな」

店の窓から立ち去る男の後姿を見送って、ジェイクは自慢のヒゲを撫でた。と、そこへ、店のドアがキイと開き、玄関チャイムのベルがガランガランと鳴った。

「らっしゃい」

「あの、すみません、今日面接予定の猿族（エイプス）、アントンです……」
純朴そうな大人しそうな気弱そうな声色の男が、消え入りそうな声で名乗った。
「おお、待ってた……あ、あんた、猿族（エイプス）？犬族（バークス）じゃなくて？」
見れば、アントンと名乗ったその男は、顔中首まで金色の毛むくじゃらで、ヨークシャーテリアのような顔をしていた。手元を見れば、自分で剃っているのだろう、短い毛がびっしり生えていて、肌が露出している。手の爪の形を見れば、なるほど猿族（エイプス）だ。だが、顔はどう見ても犬族（バークス）にしか見えない。何族の男か判別がつかない。求人募集では「猿族（エイプス）、小人族（ドウェルヴ）、妖精族（エルヴェン）、繊細族（センシティア）限定」と、確かに指定していたのだが。
「こんな見た目なので……申し上げにくいのですが……生粋の純血猿族（エイプス）です。奇形で、毛むくじゃらに生まれてしまったんです。こんな見た目では、ダメでしょうか？」
しばらく頭のてっぺんからつま先までジロジロ見て沈黙していたジェイクだった

が、ハハハ……と乾いた笑いを漏らしたかと思うと、次第にアハハと大笑い高笑いを上げ始めた。
「面白いなお前！まずは面接と技能テストだ！店の奥の工房に案内するよ‼こりゃあ傑作だ！ハハハ、なるほどねえ、うちの店に、毛むくじゃらの猿が‼はっはっは！」
その高笑いを嘲笑と誤解したアントンは、「ここも面接落とされるのかな……それとも採用されて奴隷にされるのかな……」と、不安を募らせてジェイクの後についていった。

第二話　アントンは優秀な銃職人

アントンはジェイクの工房の奥に通され、作業台に添えつけられた椅子を勧められると、恐る恐るそれに腰掛けた。

「履歴書は？」

「真っ白ですが……どうぞ」

アントンから差し出された履歴書はなるほど真っ白だ。一度鉄道会社の技師になったようだが、半年もたたずに辞めて以来、これまで5年間何もしていないようだ。

「なんで鉄道会社辞めたんだ？」

「それが……動力部の火が毛に引火して大やけどを負ってしまい、入院したため解雇になりました」

「ああ……動力部の仕事は小人族（ドウェルヴ）か猿族（エイプス）しかできないからな」

毛深い種族は毛に引火して炎上・火傷の恐れがあるため火気の近くに行くような仕

事には就けない。銃が扱えないのも同じ理由だ。

「それから就活はしていないのか？」

「見た目で門前払いでした。犬族(バークス)というわけでもないので、犬の特性もない犬族(バークス)のような猿族(エイプス)では何の役にも立たないんでしょう。特に、その、顔が気持ち悪いと……」

ジェイクは何も言えなかった。同情してしまうが、かといって励ます言葉を彼は持っていなかった。

「……なるほど。人間関係はどうだ？」

「見た目でアウトなので人と仲良くなった試しがないので判りません」

なるほど、これは深刻だ。雇ってやらない限り彼は一生ニートで引きこもりの人生だろう。同情はするが、技術のない人間を雇う余裕はジェイクにもない。

(面接じゃ何も解んねえな……。自信無さすぎ。スキルを見てみるしかねえな)

「おし、解った。じゃあ技能テストだ。今から渡す物を組み立てたり、ありあわせの

材料で修理して見ろ。時間は3時間やる」
そしてジェイクは何やらガチャガチャと硬いものがぶつかる音を立てる木箱を運んできた。木箱は机から取り出した引き出しのようにフタがなく、中の様子は一目瞭然だった。箱の中には……ガラクタがおびただしく入っていた。
「何のパーツだと思う？」
「銃ですか」
「ご名答。ちゃんと動くように組み立ててみろ」
アントンは意外と迷うことなく部品を手に取り、手渡された工具でてきぱきと組み立て始めた。箱の中には数セットの銃のパーツがバラバラに入っているにもかかわらず、一切の迷いがなかった。
（こいつ、慣れてるな……？）
そして十数分で一丁完成させ、「他も全部組み立てますか？」と聞いてきた。
「時間は沢山あるから、作れなくなるまでありったけ作って見せてくれよ」
「解りました」

また迷うことなく組み立てる。小一時間の間に四丁の銃が出来上がり、余ったパーツはネジぐらいのものだった。ジェイクはピュウ！と口笛を吹いた。
「よくやった。だがな、動かないことには合格とは言えないんだぜ」
そういうとジェイクは試し撃ち用の空気の魔法が詰めてある弾を込め、工房の奥に向かって引き金を引いた。
ガァン！ガァン！ガァン！ガァン！
なるほど、問題なく動くようだ。組み立ては合格である。
「よし、じゃあ今度は修理をしてみてくれ。客から預かっている本番の修理だ。残り二時間で完了しろ」
「解りました」
ジェイクは袋に入っている壊れた銃と、ありったけの銃のパーツや工具を持って来て彼に与えた。彼は迷うことなく銃の壊れた個所を特定し、分解し始める。すべてバラして新品のパーツを選び取り、壊れたパーツと交換してまた組み立てる。引き金を引いて動作を確認すると、ジェイクの目の前に置いた。

「できました」
これまた数十分もかからず完成させてしまった。仕事が早い。
「じゃ、チェックするぜ」
ガァン！ガァン！ガァン！ガァン！ガァン！ガァン！
完璧だ。
「よし、テストは合格だ。仕事も早いなお前」
ジェイクが銃を箱の中に仕舞い、奥に戻ろうとしたところで、アントンは恐る恐るジェイクを呼び止めた。今のうちにアピールすれば加点があって採用されるかもしれない。このチャンスを逃す手はない。アントンはアピールタイムを所望した。
「ま、待ってください、僕、他にもこんなことができるので見てもらえますか？」
「あん？何だ、見せてみろ」
アントンは背負ってきたバックパックをごそごそまさぐり、凶悪なブツをテーブルに次々陳列した。それは改造銃。リボルバーの弾数を3倍に増やしたゴツいリボルバーに、一度に何発もの弾を同時に発射する怪物のような見た目の銃、手作りのような

質感のオリジナルデザインの銃など、ガンマニアが見たら狂喜するようなものばかりだ。ジェイクも例に漏れずそれを見て狂喜した。

「何だこれ⁈　お前が作ったのか？」

「はい、全部カスタムしました。暇だったもので……。特にこれ、面白いんですよ」

それは一見何の変哲もない銃に見えたが、ジェイクにエアーの弾を借りて試し撃ちをさせてもらうと、アントンは撃鉄を起こす動作を一切せず、恐ろしい速さで連射した。この時代銃は撃鉄を起こさなければ撃てないのが常識だったため、ノーモーションで連射する銃は新鮮な驚きがあった。

「な、なんだそれえええええ!!!」

「ちょっと、いじりました」

「その銃くれ‼　売る！いや、俺も欲しい！」

アントンは生まれて初めて自分の趣味を褒められたことに得意げだ。

「差し上げます。また作ればいいし……」

「また作れるのかよ?! 売る！じゃんじゃんやってくれ！お前採用！」
アントンはホッと胸を撫でおろした。
「早速お前の寝床に案内するよ。この仕事はいつ必要になるかわからない仕事だからな、住み込みで働いてもらうぜ。求人票に書いてあったろ？」
ジェイクは工房の奥のドアを開けてアントンを建物奥へと案内する。階段を上るとそこは居住空間になっていて、寮のようになっていた。
階段を上がってすぐにキッチン兼リビングが広々と広がっていて、トイレやシャワールームも2階に備わっていた。その一角に狭い仮眠室があり、ジェイクは有事に備えてそこで眠るのだという。また、ジェイクの部屋自体は3階にあり、くつろぎたいときは自室に移動するのだという。
さて、3階は個室が何部屋かあり、その中のジェイクの部屋の隣がアントンの部屋としてあてがわれた。
「結構広いですね」
「だろ？昔は沢山の職人がここに暮らしていたんだぜ」

「その職人は今どこへ？」
するとジェイクは暫時沈黙し、「うち、一回店を畳んだんだ。その時に、解散……」と、少し寂しそうにつぶやいた。
しかし、すぐに陰気を振り払うように明るく顔を上げ、
「でも、これから立て直してでっかくすっから！」
と、ニカッと笑って見せた。マズルの端から覗く犬歯が、きらりと光った。
アントンはジェイクのその明るく振る舞おうという人柄が眩しすぎて、若干の苦手意識を感じた。人生明るく楽しく系の人種には散々虐められてきた彼は、「この人も僕のこと差別するのかな……陰気だと殴られるかな……。さっきも、仕事していないしキモがられたって言ったら、若干引いていたしな……」と、不安が隠せない。共同生活をしたら、いつかひどく嫌われて追い出されるかもしれない。
そんなアントンの暗く沈んだ様子を、「やべえ、同情されてる？」と誤解したジェイクは、ますます空元気を振りまいて、「まあ、仲良くしようぜ相棒！」と笑い、余計にアントンとの心の距離が空いてしまったという。

夕食時にテーブルを囲んだ二人は、ジェイクの振舞うご馳走に舌鼓を打ち、明日以降の生活を語り合った。

「身の回りの必要な物買い揃えないとな……」

「実家から持ってきてもいいんですけど」

「近いの？」

「遠いです」

「じゃ買ったほうが早ええよ!金は出すからよ!」

「いいんですか?すみません……」

ジェイクはどうにもテンションの温度差のあるアントンが気になる。あんなに素晴らしいスキルがあるのだから、もっと胸を張ればいいのに。

「あのなあ、なんでそんなオドオドしてんだ?あんなすげースキルがあるんだから、もっと自信持てよ!怖いか、俺が？」

「い、いいえ……はい、すみません」

「無駄に謝るの禁止！」

「す、すみま……解りました」

二人はお互いにうまくかみ合わない距離感を覚え、食事の味も判らなくなってしまったという。

（やっぱり、苦手だ……）

（なんか調子狂うなあ……）

第三話　幼き家出少女ロゼッタ

ところ変わって、ここはジェイクたちの住む国の隣国ネルドランの地方都市。とある小学校の低学年クラスで、一人の妖精族(エルヴェン)の少女が授業についてゆけず落ち込んでいた。

「こんなのも解らないのルチア?もういいです。座りなさい。ちゃんと予習復習はしておきなさいね」

犬族(バークス)の女教師がルチアの学力不足に呆れると、クラスのそこかしこでヒソヒソ囁き合う声や、忍び笑いの声が聞こえる。少女ルチアはしばしばこのような辱めを受けて、そのたびに勉強への意欲を失っていた。

彼女だって、理解できるなら理解したい。「解りました」と手を上げて鼻高々に胸を張って答えてみたい。しかし、無理なのだ。小学校に入学した時から、勉強がほとんど理解できない。文字は鏡文字になってしまうし、綴りは覚えられないし、計算も

できないし、暗記もできない。一方出席率がいいので、劣等生でも出席率の加点のみで2年生に進級した。だが、やっぱり理解できないものは理解できない。一年生の授業内容が理解できたのはつい最近のことなのだ。授業のペースが速すぎてついていけない。

ルチアは目にいっぱい涙を溜め、弾かれたように教室から飛び出した。

「ルチア！どこに行くのルチア！」

ルチアは保健室に向かって走った。保健室の先生ならこの惨めさを理解してくれそうな気がした。もうすぐ保健室、というところで、ルチアは足がもつれて転んだ。転んだ痛みが引き金になって、抑え込んでいた涙が決壊して溢れ出してきた。ルチアは床にうずくまったまま声を上げて泣いた。

泣き声を聞いて保健室から保険医が出てきて彼女に近寄ると、教室から追いかけてきた犬族（バークス）の教師もルチアに追いついた。

「ルチア、どうしたの？何か辛いことがあったの？」

「ルチア！泣くんじゃありません！教室に戻りなさい！」

しかし一度溢れ出した慟哭はなかなか自分の意志では止められない。彼女も泣き止められるなら今すぐにも泣き止みたい。

「先生、彼女の話を聞いてみましょう？」

繊細族(センシティア)の保険医がルチアを庇った。教師はやれやれと肩を落とした。

「勉強が解らない？」

保健室でようやく泣き止んだルチアから話を聞くと、彼女の悩みは深刻だった。親を学校に呼び、詳しく彼女について訊くと、彼女は幼いころから成長がとてもゆっくりした子だったようだ。

言葉を話し始めたのも3歳になってからだし、落書きを自発的にしたり、一人遊びを覚えたのも4歳から5歳頃だった。ようやく知能が発達し始めたばかりの7歳のルチアには小学校の授業は難しすぎた。教師はルチアが勉強をサボったりふざけているの

だと思い込んでいたが、両親はいつもルチアが学習する意欲だけは高かったことを見抜いていた。

「先生、子供にはいろんな子がいます。勉強を覚えるのが早い子、成長の遅い子、中には変わった子もいて世界中のチョコレートのブランドを覚えるのが得意なんていう天才もいます。うちの子は成長がとてもゆっくりした子です。画一的にみんながで きるようにすることより、子供一人一人に合わせた教育が必要なのではないでしょうか？」

親が説得する横で、ルチアは俯いて足をプラプラさせていた。

「では、特別学級を作りますか……」

特別学級という言葉に、ルチアは顔面蒼白になった。上級生に確か重度障害者だけを集めた特別学級が一クラスあった。ルチアは障害者扱いされてしまうのか。冗談じゃない！

「嫌！特別学級嫌！お家で自習にしよう?ちゃんと勉強するから特別学級は嫌！」

「でも、ルチア、あなた、人より成長が遅いのは障害者よ?特別学級ならあなたのペ

ースで勉強出来るわ？」
教師はすばりルチアを障害者認定してしまった。ルチアのか細い自尊心の火が吹き消された。彼女はショックのあまり心に深い傷を負った。
（あなたは障害者よ）
教師の台詞がリフレインする。私は障害者？
「明日から空き教室を特別学級にします。そこに通ってきなさい。一年生の勉強のおさらいから始めましょう」
ルチアの心がガラガラと崩れ、彼女は心を閉ざした。親に手を引かれて帰宅したが、道中どんな会話をしたか、どこを通って帰宅したか、何をして家にたどり着いたのか、まったく記憶になかった。呆然自失したまま、彼女はいつの間にか自室にいて、勉強机に向かって座っていた。
「消えたい。逃げたい。特別学級だけは絶対嫌」
ただでさえクラスメートに馬鹿にされているのに、特別学級行きが決まったら虐めに発展するのはルチアにも計算できた。

「逃げなくちゃ。こんなところでは生きていけない。学校のないところまで逃げよう」

彼女は陶器の貯金箱を割って今まで1ファルスも使わず貯め続けたお小遣いをすべて回収した。紙幣も結構な枚数があるし、もしかしたら見知らぬ土地まで行けるのではないだろうか。彼女には額が多すぎて数えきれない金額だったが、遠くまで行けそうな確信があった。

巾着袋にお小遣い全額詰め込み、おやつや牛乳瓶、お気に入りのぬいぐるみや宝箱をリュックに詰め込み、彼女は家を抜け出して駅に向かった。

地方都市のターミナル駅は歩いて一時間ほどのところにある。彼女は生まれて初めて自力で駅にたどり着き、生まれて初めて駅員に所持金全額を渡してありったけの距離を移動できる切符を購入し、生まれて初めて一人で汽車に乗り込んだ。致命傷を負った心の超新星爆発から始まった彼女の一世一代の大冒険。まだ見ぬ世界に胸膨らませ、彼女はいつまでも飽きずに車窓からの風景を眺めていた。

うつらうつらうたた寝をしていると、聞き覚えのある駅名がアナウンスされた。確か駅員は言っていた。「クレマトリア駅で降りなさい」と。ルチアは慌てて汽車から飛び降り、クレマトリアの地に降り立った。だが、はて、クレマトリアの街とは、一体どこだろう？

あたりはすっかり日が落ちて真っ暗だった。暗闇では何があるかわからない。ルチアは用心してクレマトリアの街を歩き始めた。

当てもなくルチアが歩いていると、彼女はいつの間にか繁華街に来ていた。ガス灯が煌々と輝いていて、昼間のように眩しい。派手な看板は色とりどりの魔法の光に照らされて、まるで夢の中のような美しさだ。

あたりをキョロキョロしながらふらふらと歩いていると、突然何か布の塊にどしんとぶつかった。と、頭上から酒臭いにおいを漂わせた怒鳴り声が降ってきた。

「どこ見て歩いてんだガキ！」

見上げれば猿のように真っ赤な顔をした猿族（エイプス）の男が、眉間にしわを寄せてルチア

を見下ろしている。
「ご、ごめんなさい」
　すると男の横にいた数名のガラの悪い男たちがルチアに詰め寄った。
「嬢ちゃん、旦那骨折れたってよ。治療費持ってるか？」
「持ってねえなら体で払ってくれるか？ああん？」
　ルチアがすくみ上っていると、バシッという音とともに男たちの壁の一角が吹っ飛んだ。誰かが男を一人殴り飛ばしたのだ。
「こんな小さい子供に何集ってんだオッサン！」
　ルチアが見上げると、顔の右側を革製の仮面で覆った猫族（シェルパ）の男が彼女を庇ってくれていた。
「何しやがんだ小僧！」
「死にてえのか！」
「死にたいのか、とは、こっちが訊きたいセリフですね」

男の額に銃が突き付けられ、その腕を目で追うと、猫族（シェルパ）の男の隣には毛むくじゃらの男が銃を突き付けていた。
「待て、ひょっとしてお前、その仮面の猫、武器屋のジェイクじゃねえか？」
「当たり。最新の銃の的になってくれるかい？」
ギャーッと男たちは驚きすくみ上り、後ろも見返ることなく逃げ出した。
「その銃の威力試す絶好の機会だったのに惜しいな、アントン」
「残念ですねぇ」
ルチアには解った。この男たちは信用できる。この人たちについていこう。
「助けてくれてありがとう、おじさん！」
「お、おじさん？お兄さんと呼べ、まだそんな年じゃねえや。それより嬢ちゃん、お父さんとお母さんはどうした？」
ジェイクがルチアに目を合わせて声をかけると、ルチアは気まずそうに俯いた。
「あ……あの……家出してきたの。お父さんとお母さん、いないの」

「い、家出ぇ⁈　どこから来たんだ？」
「知らない街」
「知らない街って……困ったな。帰り方とか駅名とかわかります？」
「よく……わかんない」
ジェイクとアントンは顔を見合わせ、こんな夜中ではどうにもならないのでひとまず武器屋に連れて帰ることにした。
「ところで嬢ちゃん、名前は？」
ジェイクが問うと、ルチアは暫時考えた。本名を言ったら連れ戻されてしまうかもしれない。知恵遅れのルチアにもそのぐらいの計算はできた。ルチアは飲み屋の看板に書いてあった『ロゼッタ』の文字を適当に読み上げて名乗った。
「ろ、ロゼッタ！あたし、ロゼッタっていうの！」
「よし、ロゼッタ。数日うちでゆっくりしていきな。お前さんの家、探してやるやるから、ほとぼりが冷めたら帰るんだぞ」
「ありがとうおじ……お兄さん！」

「ジェイクだ。よろしくな」
「アントンです。よろしく」
「よろしく、ジェイク、アントン！」
そして三人の生活が始まった。

「いいか、この家で生活するにはルールがある。まず、他人のシャワーを覗かない。着替えも覗くな。部屋に出入りするときはノックをする。洗面台やトイレに先に人がいないかノックで確認する。このルールだけは絶対だ。お互いプライバシーは最低限守ってもらう」
2階のリビングルームでジェイクが腕を組んで説明するのを、テーブルに着いたロゼッタとアントンが傾聴する。アントンはこの説明を聞くのは2回目だ。よほど重要度が高いルールなのだろう。まあ、裸を見られるのは誰しも嫌なことなので、当然のルールだとは思う。
「ロゼッタ、料理できるか？」

「できない」
「だろうな。じゃあ、飯の準備は俺がするから、皿洗いやテーブルふきなんかの、できることは各自分担してやってくれ。部屋はきれいに掃除すること。あと、玄関チャイムが鳴ったら俺を呼べ。店に客が来た合図だからな」
ロゼッタは必死に覚えようとした。不思議と学校の勉強よりしっかり頭に定着したような気がする。
「以上だ。これだけ守れば自由にしてていいぞ」
「解った！」
しかし気になるのはロゼッタの家出の理由だ。ジェイクは上座の自分の席に着き、ロゼッタにその理由を聞いてみた。
「ところでロゼッタ、なんで家出なんかしたんだ？」
「あたしバカだから、学校の勉強わかんなくて……。このままだと明日から障害者クラスに入れるって言われたの。あたし別に障害者じゃないし。絶対嫌だったから逃げてきた」

ジェイクとアントンは同情した。それは確かに嫌だろう。彼らも少なからず子供の頃虐めを経験してきた。障害者クラスに入れられた子供がどんな扱いを受けるか想像に難くない。

「なるほど……。じゃあ帰ったら障害者クラス行きか。辛いな」

「あたし絶対帰りたくないの！ずっとここに置いて！ここの子になりたい！」

「そうは言っても、家出少女を匿うと僕たちが警察に捕まってしまうよ？」

「親戚の家の子を預かってるって言って！」

ジェイクとアントンは顔を見合せた。親戚と言われてもジェイクの親戚は猫族(シェルパ)と猿族(エイプス)だし、アントンの親戚には猿族(エイプス)しかいない。妖精族(エルヴェン)の親戚を作るのは無理があるのではないだろうか？

「まあ、お前の家がどこにあるかも、調べないといけないしな……。しばらくは預かってやるよ」

「やった！」

「でも、いつかは帰らないとだめだよ？勉強は僕が見てあげるから」

そして三人は翌日本屋で小学校の勉強の参考書を買い揃え、アントンが作業場で仕事をするかたわら、ロゼッタの勉強を見ることになった。

第四話　ジェイクの仮面

アントンが銃のカスタムをしている横で、ロゼッタが小学一年生の問題を解きながらアントンに尋ねた。
「ねえアントン」
「何だいロゼッタ」
「ジェイクってなんで顔の半分隠してるの？」
言われてみれば確かに。ジェイクが顔の右側を露出しているところは見たことがない。ジェイクは寝ている時ですら顔の右側を仮面で隠している。あれは何の為だろう？
「うーん、お洒落のため、かなあ……？」
「お洒落に見える？あれが」
「ぽ、ポリシー？それともお守り的な物かも」
「顔だよ？顔痒くなったりしないの？目も見えにくくない？」

アントンはうーんと考え込んでしまった。
「アントンは仮面脱いだとこ見たことある？」
「いや、ない……。寝てるときに起こしに行ったこともあるけど、仮面はつけっぱなしだった」
「なんでだろうね？」
「さあ……？」
噂をすれば何とやら。ジェイクがアントンの仕事の進捗を聞きに来た。
「アントン、そのカスタム今日中に終わる？明日取りに来るって」
「かしこまりました」
そこへ、ロゼッタが無邪気に疑問を口にしてしまった。子供というものは時に大胆なことをするものだ。
「ジェイク、なんでいつもお面付けてるの？」
「バッ……！」
アントンが慌てて止めようとしたが、ジェイクは気にしていない風を装って、

「ああこれ。ポリシーだ。子供の頃からこれ付けてるんだ。カッコいいだろ？」
と、平然と答えた。
「顔痒くなったりしないの？」
「痒いときはちゃんと掻けるぞ」
「ふーん」
この時はこんな他愛もない雑談で済んだのだが。後日、事件が起きてしまう。
ある朝、ジェイクがなかなか起きてこない日があった。前日の夜酒を飲みに出かけ、夜中まで帰ってこなかったのだ。結果、朝になっても起きてこないので、客のほうが先に店にやってきてしまい、アントンは慌ててジェイクを呼びに行った。
「ジェイク！ジェイクどこです?! お客様が見えてますよ！」
しかしいつもジェイクが寝ている仮眠室にジェイクの姿はない。部屋にいるのかと思い階段を駆け上がり、ジェイクの部屋を開けてみるが、そこにもいなかった。リビングにもいないし、トイレにもいない。アントンは焦りのあまり、部屋の出入りの際はドアをノックするというルールを失念していた。部屋という部屋を開けて回って、

ジェイクを探した。
そして、洗面所のドアを開けた時、衝撃的なものを見てしまうのである。
鏡に映ったジェイクの顔に、仮面は無かった。驚いた表情をして顔を上げ、鏡越しに二人の目が合う。
ジェイクの隠されていた顔の右側は、ペールオレンジの肌色の皮膚が露出していて、毛の一本も生えていない綺麗な顔だった。
それを認識したと同時にジェイクは振り返り、アントンの胸ぐらをつかんで壁にたたきつけた。
顔に息がかかるほどの距離まで顔を近づけ、ジェイクが鬼の形相で睨んでくる。耳がイカのように後ろに伏せている様子を見るに、かなり激昂しているようだ。
「てめえ……洗面所と風呂場には入ってくるなって言ったよな⁉」
「す、すみません」
「俺の顔が見えるか」
「見えます」

「俺の顔には何がある」
「何もありません」
「俺の顔には醜い傷があった。そうだな？」
「え？」
「俺の顔には醜い傷があって隠していた。そうだな⁈　返事は⁈」
「はい！あなたの顔には醜い傷があって隠しています！はい！」
「絶対に言うなよ？」
「誰にも言いません」
しかし、間の悪いことにロゼッタがジェイクを探しに来て、ジェイクの顔はロゼッタにも曝け出されてしまったのである。
「ジェイク、あっ！」
「ロゼッタあああああ‼︎」
「ごめんなさい！でも、お客さん来てるの！」
ジェイクはいそいそと慣れた手つきで仮面を装着すると、客の相手をしに階下へ降

りて行った。
「ロゼッタ、ありがとう。助かった」
「ジェイクの、何あれ？」
アントンはずるずると脱力して床にへたりこんだ。
「ジェイクの顔、見たかい？」
「見た……。猿族（エイプス）みたいだった」
ジェイクは顔の右側だけきれいに毛が生えていなかった。顔の左半分は猫そのものなのに対して、顔の右側は猫のような大きな目にツルツルの白い肌で、異様に見えた。ジェイクは、そのツルツルの肌を気にして隠している？たったそれだけの理由で、あんなにも激昂するほど隠さなければならない物だろうか？やがて接客が終わったジェイクが階段を上ってきて、「おら、てめえら。話がある」と、リビングテーブルに着席を促した。

「てめえら。この家に暮らす最低限のルールは何だった？」
アントンがおずおずと答える。
「部屋に入る時はノックをすること。洗面所とシャワー室は覗かないこと、……です」
「何で破った？」
「それは……」
答えに困っているアントンに代わり、ロゼッタが答える。
「だって、お客さん来てるのに、ジェイクどこにもいないんだもん」
「だからって約束破っていいのかあ?! ああん?!」
突然語気を荒くして怒鳴るジェイクに、アントンもロゼッタも身を竦める。
相変わらずイカ耳で威嚇しているジェイクは怖い。咬み殺されそうな勢いだ。しかし、アントンはジェイクの怒りの理由を確かめたかった。
「でも、ジェイク、あなたの顔は、綺麗でした。隠すほどのことは……」
「うるっせえバーカ!!!」

テーブルをダァン！と叩いて怒声を飛ばすジェイク。空気は最悪だ。ロゼッタは半泣きになりながらジェイクを宥めようとした。

「でもジェイク、仮面なんかしなくてもジェイクはカッコいいよ」

「ああん⁈ ふざけやがって‼」

「ふざけてないもん‼」

可哀想に、ロゼッタは恐怖のあまり泣き出してしまった。しばらくロゼッタの泣き声が場を支配する。ジェイクは舌打ちをして、ロゼッタが落ち着くのを待った。怒りの炎がロゼッタの涙ですっかり湿気ってしまった。

恐る恐る、アントンがジェイクに意見する。

「顔を見てしまったのは謝ります、ジェイク。でも、一緒に生活している以上いつかはこうなっていたと思います。なぜ頑なに顔を隠そうとしていたのですか?僕が思うに、本当に、ジェイクの顔は綺麗だと思います。隠すほどのことでもなかったと思います。なぜ、隠しているのですか？」

ジェイクはふーッと息を吐いて、「昔、虐められて馬鹿にされたからだよ……」

と、顔を隠すに至った理由を語り始めた。

俺は猿族（エイプス）の武器商人のところに、猫族（シェルパ）の母親が嫁いできて生まれたハーフだ。母は美しい猫族（シェルパ）らしい猫族（シェルパ）だった。だが、俺は母にも父親にも似ていなかった。いや、ある意味どちらにも似ていたのかな。モザイクなんだよ。体のあちこちが猿族（エイプス）みたいにつるつるで、顔かたちは猫族（シェルパ）の母親に似ていた。ツルツルの猿肌なのは顔だけじゃねえ。体中に禿がある。子供の頃、猫族（シェルパ）の奴らにその禿を馬鹿にされてな。「ハゲ猫――！ハゲ猫ー！」っていじられて虐められた。奴ら、毛のある部分を炙って禿を広げようとしてさ。火傷なんかも負った。その虐めを見かねた両親が、ちょうど近所の同い年の隻眼の女子を見てさ、「あの子みたいに眼帯みたいなのする？」って言ってくれて、顔の右側を隠すことを学校に認めさせてくれたのさ。そこから、ずっと、俺は誰にも素顔を晒さずに生きてきた。顔を見られた奴は口がきけなくなる

ほど殴った。そして力ずくで黙らせてきた。だから、俺の素顔は、誰も知らないことになっていたんだよ。

そこまで目を伏せて静かに話して、ジェイクは恐る恐る目を開けてアントンとロゼッタの表情を覗ってみた。（同情されてるだろうな……）と期待したのだが、想定に反して、アントンもロゼッタも真顔だった。さらには「へー」と薄い声も漏れている。

「何だよ、お前ら。その薄い反応は」
「いや、なんか、思ったより普通の理由なんですね」
「何だ。そんなことなんだ。もっと重い理由かと思った」
ジェイクは顔に血を上らせてイカ耳になって叫んだ。
「何だとは何だ?! お前らに俺の苦しみが解るか?!」
「解ります。僕、ジェイクと逆で毛が無い種族なのに多毛症ですから。ジェイクの気持ち、よーくわかりますよ」

「あたしもバカだって虐められてきたから虐められる気持ちわかるよ」
ジェイクはそれを聞いてポカーンと口を開けて固まった。そういえば、アントンを雇った理由は何だったたか。
(毛のない猫の武器屋に、毛むくじゃらの猿が雇ってくれってか?! こりゃあ傑作だ!おもしれ—奴!これは何かの運命かな!)
そうだ、確か、ジェイクがアントンを雇おうと考えた理由の一つは、この正反対の容貌を持っていたからではないか。
「フ、フフフ、そうだな、フフフ……あはははは!そうだったな!そうだったそうだった!」
ジェイクは不意におかしくなってきて笑い出した。つられてアントンもロゼッタも笑いだす。
「フフフフ……」
「うふふふふ」
ひとしきり笑うと、ジェイクは真顔になり、

「でも、洗面所とシャワーは覗くなよ。約束だ」
と、念を押した。それについてはアントンもロゼッタも謝罪する。
三人は奇しくも同じトラウマを共有する仲間同士だった。ジェイクの素顔に関しては、「傷がある」という共通の嘘をつきとおすことにした。
この一件以来、アントンのジェイクに対する苦手意識が薄れ、三人は固い絆で結ばれることとなった。

第五話　不思議な夢の花

「勉強疲れたー！お散歩行ってきていい？」

アントンの横でまじめに勉強に励んでいたロゼッタ。しかし、ずっと頭脳を酷使し続けるのは大人でも大変なもの。アントンはロゼッタの頑張りに免じて休憩時間を許した。

「行っておいで。疲れたろう。あまり遠くに行ってはいけないよ」

「はーい」と元気よく返事して、ドアを開けて店内を通り抜け、ジェイクに一言断ってから外に出る。

「お散歩行ってくる！」

「おー、気を付けろよ」

しかし、ロゼッタはすぐに店に引き返すことになってしまう。店の前の道端に、見たこともない綺麗な花が咲いていたのである。はて、いつの間にこんなところにこんな花が咲いていたのだろう。

その花は幼いロゼッタの膝の高さほどの花で、葉序は互生し、ピンクの釣鐘型の花が三個ほど鈴蘭のように連なっている花だった。鈴蘭とは葉の付き方が違うし、ホタルブクロとは花の付き方が違う。まるでおとぎ話に出てくるファンタジーのような花だ。その花が二輪、身を寄せ合うように咲いている。

学習障害で物事を覚えるのが苦手なロゼッタだが、解らない割には学習意欲の高い彼女は、店に引き返してジェイクに訊いた。

「早かったな。忘れ物か？」

「ジェイク、店の外に変な花が咲いてるの」

「変な花？」

ジェイクを連れて花のそばに連れて行くと、なるほど確かに見たことのない花だ。

「アントンは頭いいから何か知ってるかもしれねえ。連れてこい」

ロゼッタはその場にジェイクを残してアントンを呼びに行った。だが、連れてこられたアントンも、こんな花は見たことがない。

「ホタルブクロでもないし、オダマキでもないな。鈴蘭とも違うし、スノーフレーク

とは葉っぱが違うな。なんだろうこの花」
「なんかいい匂いするかな？」
ロゼッタが這いつくばって匂いを嗅いでみると、花粉の粉っぽい香りとフローラル系の香りがする。化粧品のような香りだ。
「ママのお化粧みたいな匂いがする」
「へぇー、面白いから部屋に活けてみるか。ハサミと花瓶持ってくるよ。ここにいな」
ジェイクは2階のリビングに向かい花瓶になみなみと水を注ぎ、道具箱を漁って園芸用のハサミを取り出し、ほどなくして店先にやってきて花を切った。割合にかさばる葉っぱのせいで、二輪とも花瓶に活けたらぎゅうぎゅうになってしまった。
「こんなもんかな」
「綺麗だねー」
三人はその花をリビングの食卓の中央に据え、その夜の夕餉は花を眺めながらの優雅な食卓を囲んだ。

その夜、三人は奇妙な夢を見た。まるでそのシーンを体感しているようなリアルな夢で、五感が限界を超えて覚醒したような、現実より生々しい体験だった。
ジェイクは胸をかきむしられるような焦燥感を感じながら、去り行くアントンの後姿に追いすがった。
「頼む、行くな！行かないでくれ！お前がいなくなったら俺は生きていけねぇよ！」
しかし、アントンは顔中を覆う毛の中から射貫くような冷たい目でジェイクを一瞥するのみだ。
「何をいまさら。この店に僕の居場所なんてないですよ」
「そんなことない！判ったんだ、俺、お前のことが好きだって！お前を尊敬している。この店にはお前がいないと、もう店をやっていけねぇよ！頼む！何でもするから行かないでくれ！」
締め付けられるような胸の痛みと、溢れて止まらない涙。そのままジェイクは自分のうめき声で目を覚ました。仮面の内側がひんやりと濡れて皮膚がつっぱるような感覚。ジェイクは仮面を外して涙をぬぐった。

「何っー夢だよ……」

一方アントンはというと、夢の中でジェイクを襲っていた。ジェイクの下半身に顔をうずめ、裸のジェイクを押し倒している。

「やめろ、アントン！何するんだ！」

アントンの心臓は極限まで興奮し、体の奥が燃えるように熱かった。

「あなたが好きです、ジェイク。あなたのためなら、僕は何だってしてします。どんなことだって喜んでします。あなたを愛している……！」

その後、思いが果てるまで二人は体を重ね、……アントンは目を覚ました。

「え……？今のは、夢……？なんて夢だ。僕が、ジェイクを？」

ロゼッタはというと、二人の我を疑うような夢とは大きく異なり、夢らしいファンタジックな夢だった。

「ロゼッタ、お前の超魔力を思う存分振るってきな！」

ジェイクに背中を叩かれて送り出された先で、見知らぬ大人たちとともに大冒険に出たロゼッタは、巨大なモンスターを前に魔法銃を構えた。
「みんな、下がって！えーい！死んじゃえ！」
ロゼッタが銃の引鉄を引くと銃口からは炎のドラゴンが生まれ、敵に向かって襲い掛かり、大爆発を起こす。
それを見ていたジェイクは、「お前、すげえよ！こんな力があったんだな！これからも大活躍を期待してるぜ！」と、ロゼッタの頭をくしゃくしゃっと撫でまわした。
「エヘへ、ジェイクのためならあたしなんだってするよ！任せて！」
目を覚ましたロゼッタは、人生で味わったことがないほどの高揚感と優越感に浸っていた。
「あたし……あたしに、あんな魔力が……？」
翌朝、気まずい思いをしながらジェイクとアントンがリビングに降りていくと、ロゼッタが賑やかに足音を立てて降りてきて、ビッグニュースを喧伝した。
「聞いて！夕べね、面白い夢見たの！すっごかったんだよ！めちゃくちゃリアルな

の！」
「あ、ああ、そうか」
「へ、へえ、どんな夢だい？」
ロゼッタは胸を張って夢の内容をまくしたてる。
「あたしに秘密のパワーがあってね、魔法銃を撃ったらどぉーん！って、ドラゴンが出てくるの！それ見てジェイクがね、『お前凄いなー！』ってめっちゃ褒めてくれたの！すごかったんだよ！ガオーン！ってでっかいドラゴンが出てきてさあ！冒険者の人たちビックリしてたの。あたし大活躍だったの！」
「ほう、お前に隠された力ねえ……」
「ああ、この夢本当にならないかな。ジェイクの役に立ちたい」
まさに夢見心地のロゼッタを横目に、ジェイクはアントンにそれとなく聞いてみる。
「お前、なんか夢見た？」
「ええ?! い、いいえ、特に何も……」

急に話を振られたアントンは夢の内容を思い出してドキリとしてしまう。咄嗟に嘘をついたが、言えるわけがない。ジェイクをレイプをした夢だなどとは。アントンは自然な流れを装ってジェイクにも聞き返してみる。
「ジェイクは何か夢見ましたか？」
「ぅ俺ぇ⁈ 俺は、別に夢らしい夢は……覚えてねぇよ」
思わず動揺してしまったが、不自然ではなかっただろうか。話を振られても困ってしまう。アントンに想いを告げて追いすがる夢だなどとは。
この日はただの夢で済んだのだが、その夜は前夜の夢の続きともいえるような、同じ内容の後日談の夢だった。ジェイクは孤独に泣き、ロゼッタにそれは恋ではないかとアドバイスされる夢。アントンはジェイクに何度も体を求められる夢。ロゼッタだけが健康的に、大魔法使いになる大冒険の夢である。
その次の朝の空気と言ったら目も当てられない。ロゼッタはますます有頂天に夢の話をするし、ジェイクとアントンはお互いが目を合わすのも気まずい。ジェイクは何となく恋しい気持ちを引きずってそわそわしてしまうし、アントンは心臓だけが興奮

から冷めやらず顕在意識との壮大な解釈違いに混乱してしまう。
（この夢は墓場まで秘密にする……）
（僕が、ジェイクと……？やめてくれ。うう、心臓が辛い）
しかし、その夢は早々に現実になることになる。
その日、店に一人の猿族（エイプス）の紳士が銃の修理にやってきた。
「この店に腕のいい修理工がいると聞いてやってきたのだが、いるかな？」
ジェイクはアントンを褒められて、得意になってアントンを紹介しようとした。
「ええ、いますよ。ちょっと変わったやつなんですが、日数をいただければ素晴らしいカスタムもいたします。連れて来ましょうか？」
「是非。噂に名高い修理工さんに一度お目にかかってみたいと思っていたんですよ」
「アントン！お客さんにご挨拶しな！」
ジェイクがアントンを呼びに行くと、アントンはその顔を客の前に出すのをためらったが、しぶしぶ店に出て行って挨拶した。

「修理工のアントン・ニコルソンです。よろしく」
すると紳士は差し出されたアントンの手と、毛むくじゃらの犬の様な顔を見比べて、握手の手を引っ込めた。
「あ、貴方何です？犬族（バークス）？猿族（エイプス）？犬族（バークス）なのに修理なんかできるのか？」
ジェイクはアントンを庇って説明する。
「ああ、彼は猿族（エイプス）なんですが、ちょっと髭が濃くてですね……」
「猿族（エイプス）?! その顔で猿族（エイプス）だって?! 気持ち悪い！こんな不潔な男に私の銃は預けられないな！汚らわしい！髭ぐらい剃ったらどうだ！」
紳士の素直な反応に、アントンは「またか……だから出て来たくなかったんだよな……」と、案の定とは思いつつも傷ついてしまう。アントンは慣れっこだが、ジェイクにとっては信じられない反応だ。我が事のような無礼に、怒髪天を突いた。
「何てこと言うんだあんた?! 不潔だって?! ちょっと髭が濃いだけだろうが！毎日シャワーさせてやってるぞこっちは！ちょっとあんまりじゃないのかその言い草は

?!」
「何だと?奇形の猿に任せる銃は無いといって何が悪い?」
「ジェイク、いいのです」
「よくねーよ!見た目でこいつの何が解るっていうんだ?! 俺はこいつの腕に惚れ込んでこいつを雇ってんだ!こいつを尊敬している!うちの自慢の修理工の悪口言う奴はうちの客じゃねぇや!帰りやがれ!」
ジェイクはまくしたて、紳士の胸ぐらをつかんで玄関に追いやった。
「な、何て失敬な店主だ!私は客だぞ!代わりの修理工を出せと言っているんだ!」
「うちの修理工はこいつ一人だけだよ!失敬はどっちだ!おら、帰れ!」
ジェイクは胸ぐらを掴んだままドアを開け、客を蹴り出して玄関のドアを閉め、施錠した。客はやんやと罵声を浴びせていたが、やがて諦めて帰って行った。
「アントン、悪かったな、お前を店に出しちまって。気にすんなよ、あんな奴は。俺はお前を尊敬しているぜ」
アントンは唖然と一連の流れを見守っていたが、心の奥で何かがスパークした。未

だかって、こんなに必死に自分を庇ってくれた人はいなかった。そのうえ尊敬しているだなんて。

(ああ、この人に、地獄までついていこう)

アントンには、ジェイクの笑顔が菩薩のように思えた。

「ジェイク……。ありがとう、ございます……！」